



子どもの世界の表と裏

津守 真

保育者とかかわりの中に生まれる遊びに子どもの世界はあらわれる。逆に、遊びが妨げられたとき、そこから立ち上がるころにも子どもの個性的な表現がある。

手を引く——思いを伝える

ひとりの子どもが登園すると、私の手を引いてピアノに連れて行った。その子の中には前日の記憶があって私の手を引いたことは明らかだった。子どもが大人の手を引くときは、(1)自分の眼前の目的を果たすために大人の助けを求めるとき、(2)大人に親しみを寄せるとき、(3)自分の世界を実現するのに大人の助けを必要とするときなどが



ある。この場合は三番目である。前日、いつもプロペラを手から放さなかったその子は、ピアノのリズムと一緒に汗をかいて走り回り、心が解放された。そしていつのまにかプロペラを手から放していた。力いっぱい走ることによって、人は現実から解き放たれて、広い世界に目を向けることができる。この子は自分の世界を実現するのに大人の助けを必要としていた。

走り回る——解放される

この日、その子は私にピアノをひかせてホールをぐるぐると走り回り、それにつられて何人もの子どもたちが一緒に走り回って、朝のホールはひととき賑やかな活気にあふれた。

顔を伏せる

ひとしきり走った後、別の子どもが来て、その子の髪を引っ張った。髪を引っ張るのにもいろいろの場合があるが、このときは他人への関心がこのような行動にあらわれたのだと思う。引っ張られた子どもにとってはショックだった。その子は一度手放したプロペラを再び握って顔を伏せ、低い声でうなずいて動かなくなった。そのままにしておいたら、ひとたび開かれたこの子の世界が再び閉ざされるだろう。傍らにいたF先生が電気掃除機をもってきた。

電気掃除機——エネルギーの供給

電気掃除機は大きな音をたてた。その子は驚いてみつめ、それにまたがって機嫌がなおった。おもいがけないときにふりかかった災難を、子どもは電気掃除機からエネルギーを供給されて、乗り越えることができた。乗り越えるのにそのエネルギーを外から供給されねばならないときがある。子どもにとっては、電気掃除機は宗教的とも言える程に身边を超越した力なのだろう。しかもそのエネルギーを発する機械にまたがってこの子はそれを自分のものとした。

人形の手

それから、その子はとれた人形の手を二本もってきて、体のわきにおいた。彼が何故こわれた人形の手をもってきたのか、私は不思議に思ったが、じきにその意味を悟った。手を使ったことがなかったその子が、はじめて自分の手で弁当を食べ、自分の手で紙を切り、手を開いたのは数週間前のことだった（拙著『保育者の地平』第一章4-4 手を使うこと参照）。自分の手についてその子の強烈な体験が、人形の手に着目させたのだろう。とれた人形の手だけを見つめていても解答はでないのだが、継続する保育の

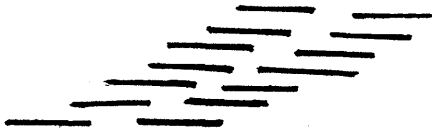


図 1

中の知識がその答えを与えてくれる。

積み木を積む——自分の世界の実現

それからその子は小さな長方形の積み木を、階段のようにならして七段階重ねて積んだ。崩れても怒らないで自分で積み直した(図1)。また、二本の柱の上に長方形の積み木をのせて、更にその上に二本の柱をたてて長方形の小積み木をのせ、それを三段重ねにした。その子は心を集中させてそれをした(図2)。注意深く進めるその作業の間、その子をひとりにおいておいた方がいいと思い、私は遠くから見ている。三段積み重ねるとその子は私の手を引き^きにきた。私がもう一段積んで、次の積み木を渡すと、自分で更に積み、六段まで積み上げた。

子どものイメージにしたがって積み木を積むことにこの子の世界が表現されていると考えていい。

高く積み上げようとするのは、バベルの塔のように、人間の心の深くにある望みであろう。それは成長とともに文化の土壌で培われなければ自分勝手な野心にもなるのだが、いまはそれよりも執られていた心から解放されて、自分が高く積み上げる世界を体験することに目を向ける時である。

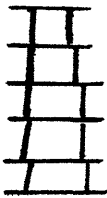


図2

無限に高く積み上げようとする野望は、人生のどこかで神の手によって崩される。

自分の頭を私に叩きつける——他人から受動的にされたことの再現

そこに別の子が来て、高く積んだ積み木を倒した。その子にとっては思いがけないときにふりかかった災難である。ひっくり返ったときに頭が床に当たった。その子は積み木を放り投げ、低い声でうなった。私は急いで近寄り、その子をかばった。

その子は泣いて私の頭に自分の頭を叩きつけた。長い間そうやって声をあげて泣いた。ときどき頭を床にも叩きつけた。これは自分が他人からされた通りの状況の再現である。

「こうやって僕はやられたんだよ」と、感情をこめて表現したのである。私はその子の気持ちを慰めるようなつもりで傍らにすわっていた。そこに私が気が付かないうちに、積み木を倒した子が来て、更にその子の髪を引っ張った。

うらやみ

私がかがみこんでその子をかばったとき、別の子は一層はげしく髪を引っ張ろうとし、あたりの物を私に向かって投げた。その子をかばった私の行為に対する裏側と考えていいだろう。丁度そこに来たF先生が間にはいってくれたので、私は髪を引っ張った子と向かい合うことができた。



F先生がもってきた掃除機が、涙をふいた紙を吸い取るとその子の機嫌が直って来た。おしっこに行きたくなり、おしっこをして、気持ちがもとに戻った。おしっこと共に感情も流れ去ったように思われた。



この一日の中で、この子が一番自分の世界を表現しているのは、積み木を高く積んだところであろう、手を使って積み木を高く積むこと、それも高くするだけでなく、自分のイメージをもって複雑な積み方をしている。その前段階として、手を引いて大人に頼むこと、ピアノに合わせて走り回ることなどがあつた。そして積み木の遊びにこの子の個性的表現はあらわれた。この子はこの日満足したに違いない。



ひとりの子どもが保育者に助けられて自己表現をすると、それがうらやましくて積み木を壊したり髪を引っ張ったりする子どもがあらわれる。更にそれに反応して別のできごとが起こる。こうしてひとりの子どもが何かをすれば、社会的状況が変化し、その裏側の出来事が起こり、更にそれは別の反応を呼び起こす。髪を引っ張ること、顔を伏せること、電気掃除機、頭を叩きつけることなどはそれである。そこにもまたその子の個性的表現があらわれる。

